

していたので、それを提示することで反論に代えた。

- ・今回の授業では色んなことを考えさせられた。例えば『踏み倒していいよ』の話で絹村先生は貧しくて学校に通えないのは生徒のせいではないと教えてあげるために踏み倒していいよと言ったとおっしゃっていたが、その通りだと思った。わたしはそういう経験をしたことはないが友達にはそういう子がいた。友達同士で助けてあげるのはどこか同情されてると思ったらしく受け入れてくれなかったため、そのときに先生がそのような言葉をかけてくれればなあと考えてしまった。わたしも高校時代、絹村先生のような先生がいればなあと思ってしまった。

私も、貧しい生徒やその保護者の多くが、こういう他者からの「施し」を決して望んでいないことはよく承知していた。極貧の中でも奪われたくない「最後のプライド」のようなものがあるのだ。

次の授業の冒頭、いつものようにいくつかの意見を取り上げてひとつひとつコメントをしていった。そして、例の意見のところに来たとき、自分がいつになく緊張しているのがわかった。私は最初に、乱暴な言い方ではあっても本音の意見を書いてくれたことに礼を述べた。「私の勝手な解釈だが私への信頼があって書いてくれたのだと思い取り上げた」と言った。そして以下のコメントを述べた。

前の授業での私の発言は、「暴言」をはいても良いということを書いたかたっけではない。「暴言」をはくことは確かに問題であるが、暴言を吐かざるをえない、本人も自覚できていない内面に思いを馳せ、その裏にある心の痛みに寄り添おうとすることなしに、暴言をや

めさせることはむずかしいし、そういうアプローチをするのが教育＝生徒指導ではないか、ということを書いたかった。それから「暴言」は、「教師、大人に向かって」だけでなく誰に対しても本来してはならないことだ。また、「踏み倒してもいいよ」発言は、「大きな声ではいえないこと」だとわかりながら、自己責任から解放させてあげたい、ぎりぎりの選択だった。このことについて舌足らずの説明だったとしたら申し訳ないと思う。しかし、「つらくても支払っている人もいるから」というような、頑張れている人がいるからあなたも頑張れというのは、頑張れないあなたが悪いと、2重の自己責任を負わすもので、私の口からは到底言えないことだった。

次に私は、様々な困難を抱えた生徒と向き合う時や、さらには教育活動全般にわたって重要だと思われる、教師としての仕事の「遂行中断性」⁶⁾について次のように述べた。

- ・「遂行中断性」とは教師としての自分の「役割」を一旦中断し（教師の権力性を一旦宙吊りにして）、一人の人間として生徒に向き合うことである。
- ・「遂行中断性」は生徒の側から迫られる場合が多い。
- ・例えば、厳しい頭髪服装検査で不満を漏らす生徒、傷ついている生徒がいたとき、その学校の教師としての立場を一旦降りて、一人の人間として生徒に対峙し、生徒の声を聞き取り、共感できることには共感する。
- ・「遂行中断性」は、生徒をいったん受容しその内面の声を聞き取ろうとする姿勢を持つということでは、スクールカウンセラーによるカウンセリングの手法に近いものがある。しかし、スクールカウンセラー

- との決定的な違いは、教師は、「教師として振る舞う」ことが「スタンダード」として求められ、「遂行中断」は一時的なものであること。
- ・教師の「遂行中断性」は、教師としての仕事を相対化し、自分の教育実践の方向性を反省的に検証するよい機会となる。

この日の振り返りでは、例のコメントを寄せた学生に対してかなりきびしい意見も出てきたが、「人格攻撃」とまでは言えないと判断し、それらの意見も排除することなく次の授業ではいつものように全員の振り返りコメントを配布した。

(4) 「異質」な教師との連携について学ぶ

当初は、授業でもっとたくさんの実践を扱う予定であったが、時間の都合で実際に扱ったのは分析練習用を含めて4本の実践記録であった。そのひとつ、いじめ問題に真正面から取り組んだ土居和江さんの実践記録・「一平君が学校をやめたいと言っている」⁷⁾にかかわる討論を紹介したい。

この実践記録を読むにあたって、他の実践記録の分析討論と異なった点は、事前に、実践記録を読んだ感想と質問、何を議論したいかについて全員に課題レポートを提出させていたことであった。学生のレポートをすべて実践者の土居さんに送り、学生から出された質問に土居さんからメールで回答をもらってから分析討論を行った。学生が疑問に思う事実関係や背景、実践者の心境などひとつひとつに土居さんは実に丁寧に答えてくれ、学生たちも感銘を受けていた。

この実践の核心は、土居さんがいじめ問題をクラス集団に開いていき、生徒たち自身に、取り組ませ、和解に導いている点である。が同時に、土居さんがあえて指導観が異なる副担任のB先生を、クラス討論に同席させることで、問題に取り組むときの教師の関係性のあり方や「教師集団」

づくりの方向性を考えることができる実践となっている。

したがって私の提起した討論の柱は、次の2つであった。

1. なぜ生徒たちは、一平君へのいじめ問題に向き合う「話し合い」ができたのか？土居先生の指導のありかたから明らかにしていこう。
2. この実践の中でのB先生の存在意味がもしあるとしたら、それは何だろうか？

紙幅の関係で2の柱に沿った討論の様子のみを紹介したい。

ちなみに、土居実践に出てくる副担のB先生については、事前のレポート課題の中で、多くの学生が、B先生の生徒を信じない姿勢や、「いじめや暴力は絶対いけない」と言いながらも箒で生徒を叩いたりする行為などに強い反発心を書き綴っていた。

- ・今回の土居先生の実践を読んで、最後に議論したB先生の存在意義について自分たちの班はみんなとおなじB先生は土居先生の引き立て役だと考えていました。しかし、別の考えを持った人が土居先生は寄り添いすぎだとの意見を聞いてハッとしました。班内では本当に土居先生の引き立て役として話がまとまりみんながそう思っていると勝手に思っていました。その意見を聞き、確かにB先生は現実めいたことを言い、さらには大人の社会というか、これから先社会に行ったら、B先生のような考えで切り捨ててしまう人が多いことをも教えてくれるのではないかと考えることもできました。また実践を読むとしたら教師志望のわたしたちと同年代の生徒であることからみんながみんな、土居先生のような先生に憧れるがそれでも実際にはB先生のような教師も多くいて、意見が違う先輩方とどう話し合っていくべきかを学ばせるためにも登場させる必要があったのかなと他の意見を聞いて気づくことができました。いろんなことを考え、学べた実

践でした。

- ・土居実践討論2について 討論で全体から出てきた意見は私には思いつかない考えだった。特に正しい指導法ひとつしかない!と考えていた私にとって、指導方法アプローチは一人一人異なるということに気がついた時、とても心が楽になった。それは自分にしかない味で、生徒と関わっていても良いと感じたから。生徒と教師について考えることが多かったが、教師と教師についても考えるべきだと改めて感じた。決して生徒の前で同僚を否定したり陰口をいうことはするべきではないと思う。教師間の不仲は絶対生徒にも響く。もしB先生が話し合いに参加しないまま、話し合いがうまくいけば、その後B先生が生徒たちと関わりづらくなってしまし、立場がなくなってしまうと思う。
- ・土井先生の実践において、生徒を信じようとしなないB先生に対して最初はあまりいい印象を持たなかった。しかし今回の授業でB先生の立場や役割について考えたときに、土井先生が生徒を論しつつも全面的に信頼する一方でB先生の「いじめを断固として許さない」姿勢も、いじめはいけないという根本的な論理に直結する不可欠な存在であるように思われた。
- ・B先生の正論であるが生徒に対し強く言いすぎてしまうところや、いじめの加害者を一方的に責めるところなどの悪いところばかりに目がいつてしまっていたが、逆にB先生の与えるいい影響もこんなにもあったんだなあと思いました。それは土居先生が上手く良い方向へと導いたからこそだと思います。教師の中でも様々な考え方、指導法があると思いますが、大人として上手く対処することが大切だと改めて気づきました。
- ・こうして具体的な発言から討論すると、この実践に関することだけで

なく、様々な話題に広げられて、非常に有意義なものであると思った。特に B 先生の存在意義に関して、私は初め、B 先生に対し否定的であったが、事実を知り、討論する中で、指導観の多様性を知れて良かった。

この討論のまとめは、学生が事前に質問したことへの次の土居さんの回答を改めて示すことで十分なのではないかと思われた。

質問 9 1 つ目は、5 月 19 日（月）に行われた話し合いになぜ副担任の B 先生を呼んだのかということである。B 先生と生徒たちの関係性を考えると反発し合うのは予想ができたはずである。それでも B 先生を呼んだのには何か訳があるのだろうか。

回答 9 B 先生は副担任の先生で、3 年間、担任・副担任コンビでいくことになっています。考えが違って、いっしょにやっつかねばなりません。私は時々 B 先生と休憩室で話をして、「ひとつひとつの出来事に対して考えは違うけれど、それぞれが自分らしく精一杯彼らに向き合おう」という互いの了解をとりながらやっていました。B 先生が離婚した元夫の暴力に苦しみ、それゆえ暴力を憎むことも話してもらったし、気持ちの熱い人であるともわかっていました。クラスの子どもたちにも、なんだかんだ言いながらも「B 先生にぼくらの気持ちをわかってほしい」という気持ちがあると思えました。B 先生に、私とは違う角度から意見をしてもらおうと、よいことがあるのです。ときに面倒くさいとしても、さまざまな大人の姿を見せるのはよいことなのではないかと思います。

質問 14 実践記録を読んで、クラス担任の土居和江先生と副担任の B 先生との間では意見や考え方の違いが生じているように感じた。学校

や教育の場では、同僚性が重要であり、先生間同士での連携が大切であると学んだ。しかし、この実践記録でのB先生の生徒に接する態度は、生徒からも反発されているように、生徒を信用していないように感じた。実践記録のような出来事や事件に対処するためには、教師間での信頼関係を築き、同僚性を築いて解決することが重要だと思う。生徒の為を思うというB先生の考え方はあると思うが、自分の考え方とは異なる先生とも連携を築くためにはどのようにするのがよいのか聞いてみたい。

回答 14 自分の考えとは異なる先生とも連携していくのは、教育の現場ではとても大切なことと私は考えています。学校の仕事はチームの総力で成り立つものです。生徒はいろいろな大人に接して、人の考えはさまざまであることを複雑に学ぶ方がよい。提携するためには、自分自身が、考えの違う人を排除しないで、理解を深めることだと思っています。そして、「でもそれは違うのではないか」と率直に語る勇気も持ちたいと思っています。私の場合はこんな流儀でやってきましたが、あなたはあなたのやり方を創っていかれたらいいと思います。

2つの柱での討論を終わっての学生たちの振り返りの感想を送ると、土居さんから学生たちへのメッセージが届いた。

最初のレポートよりも、格段に深まった理解と、なによりも、みなさんで議論し、分析することに喜びを感じた人がたくさんいるらしいことがわかり、頼もしく思いました。私も、若い人たちのナマの考えに触れる機会を得たことをとても感謝しています。これからの時代、教師の仕事にはますます困難が予想されるだけに、教師を目指す若いみなさんに、「がんばれ」ということばを送りたいと思います。

ありがとうございました。

土居和江

5. 終わりに——授業は「公共空間」と成り得たか——

ここまで、学生たちの討論の様子を振り返りコメントを引用しながら書き綴ってきた。いずれの授業においても、振り返りの中で、授業の中身と並行して討論そのものについて評価するコメントを寄せる学生が多かった。その中では、「自分の意見と違う意見があることを知れてよかった」という「複数性」の認識とそれを受容することの体験が語られたり、「他の意見を聞いて、なるほどと思い自分の意見が変わっていくのがおもしろかった」という「意外性」に出合って自分を更新していくことの楽しさが語られたりしていた。

また、毎回の授業において、前回の授業の振り返りコメントで公開を希望しないもの以外すべて印刷して配布していたので、討論以外の誌上でも「複数性」や「意外性」への気づきが学生たちの中に起こっていたようである。

時折、学生から授業の進め方そのものに対する意見・要望も出された。授業冒頭の「振り返り」に時間をかけすぎて、その日に予定されたテーマにかかる時間が足らなくなってしまうと指摘されたことがあった。私は反省し、学生の振り返りコメントの抽出数に「禁欲的」になり、スライド2枚におさめる努力をするようになった。学生の言うことがもっともなので当然であるのだが、こうした「授業への要求」を聞いて改善していく私の姿勢を学生たちは喜んでくれた。学びのある「公共空間」とは学びの質を高めるために必要な授業改善に向けた要求が授業者に向かって発せられ、それが応答される場でもあるのかもしれない。

私は、討論の最中、学生が各グループの意見や個人的な意見を発表すると、言葉足らずのものは発言者の意図を酌みながらわかりやすい別の言葉

で言い換えたり、他の意見とどこが違うのかを明確にして、全体の討論の中でのその発言の意味づけを行ったりしている。これは討論を組織するコーディネーターとしての役割であるが、ある時こんなことがあった。10以上あるグループから出されたそれぞれの意見を順番に発表させ、それを私が意味づけていったのだが、中間にさしかかったあるグループの発言について私は何もコメントせずにスルーした。そのことを、振り返りの中でこう指摘されたのだ。「せっかく発表したのに先生が何もコメントしないのでがっかりした。自分たちの意見は意味のないものかとも思った」

私は、自分がスルーしたことに自覚的だったので、次の時間の冒頭で素直に謝り、いいわけではあるが、と断りながら正直に本当の気持ちを語った。

次々と意見を聞いて、瞬時にその意見の意味と、討論の中での位置づけを判断することは並大抵のことではなく、その時は私のキャパをはるかに超えていたのだろう。私はその班の話の話を確かに聞いてはいたが、疲れで頭の中が真っ白になっていて何も頭に入ってこず、思わずスルーしてしまった。

学生たちは私の率直な「いいわけ」を受け入れてくれたようだった。それにしても、こうした討論のコーディネーターの役割を、学生たちにも担わせ体験させることで、学生たち自身に討論のつくり方を少しずつ学ばせる必要があるのかもしれない、とこの時にふと思った。いつまでも私が仕切っている空間が公共空間と言えるのかどうか、という問題でもあるからだ。

学生たちに与えた最後の課題は、『生徒指導論』で何を学んだのか」というテーマの1分間スピーチとレポートであった。どのスピーチやレポー

トも内容的にすばらしかったが、授業が「公共空間」に成り得たかどうかのヒントになる部分について学生のコメントをレポートの中から拾い出してみたい。(下線は引用者)

- ・実践記録を読むこと自体経験がなく、その実践記録に関してグループで話し合うということも初めてのことであった。最初は単なる感想だけで終わってしまっていたが回数を重ねるごとに様々な意見を聞くことができ、異なる視点から考察できるようになったと思う。グループで話し合うことで、自分とは違った新たな視野を獲得することができた。
- ・私が生徒指導論で学んだことは二つあります。……二つ目は「ディスカッションの面白さ」です。私は幼いころから同年代の感覚や思考が自分のそれとは合わないことが多く、いつしかそういうものへの理解の興味・関心が薄れていました。そのためディスカッションはあまり好まないままこの年になっていました。しかし半期のみにもかわらずこの授業でほぼ毎回話し合いに参加することでいつの間にか他人の意見や考えを知ることがとても楽しくなっていました。これは自分の中ではかなり大きな変化で今まで自分の人間性はあらかじめ把握しているつもりでしたが、この機会によってジョハリの窓が一つ開いたような感覚になりました。
- ・私が「生徒指導論」で学んだことは大きく分けて4つあります。……4つ目は、意見の多様性についてです。毎時間のグループワークで、学部も専攻も超えた人々と意見を交換するなかで、自分とは全く異なる考え方を持っていたり、同じであってもそう考えるに至った背景が違ったりと、自分の考え方を見つめ直す良い機会が持てました。
- ・この授業は、毎時間グループになって話し合う形式で、正直最初は